

卒業論文作成上の注意

目次

●文学部	1
●経済学部(経済学関係)	4
●経済学部(商学関係)	7
●法学部甲類(法律学科篇)	10
●法学部乙類(政治学科篇)	14

【文学部】

学士課程入学者など、すでに卒業論文を書いた経験を持つ学生も多いと思われるが、ここでは、基本に立ち帰り、本塾文学部の学生を念頭に、卒業論文についての基本的な考え方を確認しておきたい。

まず、卒業論文は、入学した分野(類)のカリキュラムに沿って積み重ねてきた勉強が、その分野の学位を受けるにふさわしいレベルに到達していることを証明する、各分野の研究論文である。もちろん、研究論文には、学問の歴史に残る第一級のもの、学会で賞をもらうようなもの、研究者仲間に回覧するものなど、さまざまなレベルのものがあるが、卒業論文は、どんなに初歩的で拙いものであっても、そのような研究論文のひとつである。

卒業論文は、研究論文であるという点で、感想文や随筆とは異なる。これは、感想文や随筆が悪いというのではなく、種類が違うという意味である。以下、いくつかの側面から、卒業論文作成上の注意点を見ていきたい。

卒業論文を書くためには、テーマを決める必要がある。その際に最も重要なことは、テーマを絞り込むことである。「東洋と西洋の思想の違い」「哲学と法学から見た人間の幸福」「手塚治虫と現代社会の諸問題」、これらはすべて、卒業論文のテーマとしてふさわしくない。卒業論文は長大だと言われることがあるかも知れないが、高々数万字程度であって、普通の単行本の十分の一程度である。したがって、意識としては、自分の学問の集大成として大作を書くというのではなく、きりっと引き締まった短編を書くという気持ちを持つてほしい。そのような短編には、あれもこれもではなく、一つに絞り込んだ問題設定が不可欠である。具体的には、以下の点に注意するとよい。

1. テーマは「考え出す」のではなく「選ぶ」。

2. 分野横断的なものは避ける。
3. これまでの自分はいったん捨てる。

まず、前に述べたように、卒業論文は研究論文の一種である。つまり、ある研究分野の中で、なんらかの貢献をなすような論文であることが求められる。したがって、今までどれも関心を持たなかったことについて、まったく新しいことを書こうとするのではなく、すでにある研究領域の中で、さまざまに論じられてきた問題の中から、関心があるもの、興味を持てるものを探し出すというアプローチが有効である。もちろん、そのような既存の問題やテーマをそのまま自分のテーマにすることはできないが、そのような既存の問題から出発して、自分なりの絞り込みや味付けを行うことで、具体的な卒業論文のテーマが決まっていく。

また、通信教育課程に入学する学生の中には、すでに自分なりの経験を積み、なんらかの得意分野をもっている人も多い。しかしそのような人が陥りやすいのが、上記二番目の点である。自分が得意とする分野を、卒業論文の中に持ち込もうとして、結果として、焦点が定まらないぼんやりとした論文になってしまうことがある。たとえば、すでに法学の知識を持っている人が、哲学の勉強をして、この両方の知見を交えて「幸福論」を論じようとするような場合である。一見、すばらしい論文が書けるように思えるが、じっさいにはうまくいかない。学問分野の違いは、想像以上に奥が深く、「引き締まった短編」で扱えるようなものではない。ほとんどの場合、たんなる並記や羅列に終わり、その比較の中から有効な主張を引き出すことができない。領域を横断した研究は、それ自体、必要であり、魅力的でもあるが、実際にそのような研究を遂行することは、学問的に極めて高度であり、成功することは希である。

これらのことは、上記三番目の点に集約するであろう。ある学問分野の研究論文を書こうとするのだから、それまでの小さい自分をいったん捨て、新しい土地に飛び込む気概を持ってほしい。学問とは、何かを積み上げ、獲得していく道である一方で、自分の中にある誤りを見つけ、破壊し、捨てていく道でもある。自分の観点から見ることも必要だが、その「自分の観点」なるものに固執しすぎると、見るべきものも見えなくなってしまう。せっかく飛び込んだ学問の世界なのだから、それまでの実績や知識や思想をいったん括弧に入れて、思う存分その海を泳ぎ回ってもらいたい。

これらの点は、じっさいには、卒業論文指導の中で、指導教員から教わることになるだろう。その点では、自分に合った指導教員がいなければ、いい卒業論文を書くことはできない。ときどき、指導教員がなかなか決まらず、卒業論文指導に入るのが遅れる学生がいるが、その多くは、学生が示したテーマについて、指導できる教員がないというケース

である。繰り返して言うが、卒業論文は研究論文である。研究論文には、その分野の研究に携わる専門家の指導が必要不可欠である。本塾は多くの教員をかかえ、その分野も多岐にわたるとはいえ、それでも、全学問分野を網羅するにはほど遠い。したがって、学生が自分の卒業論文のテーマを考える際に、テーマそれ自体とともに、どの教員の指導を受けるかということにも配慮する必要がある。通信課程の学生は、教員との接点が比較的小さいので、この点を負担に感じるかも知れないが、『文学部専任教員一覧』や、インターネットに公開されている教員情報、あるいは、スクーリングや科目試験での経験を活用して、どのような教員が、どのような研究を行っているかについて、とくに自分が卒業論文を書きたいと思っている分野については、日頃から意識して情報を集めることが重要である。

卒業論文の書き方についての細部は、学問分野によって異なる点が多いので、一般的に述べることは難しい。じっさいに卒論指導を受ける中で、それぞれの分野の約束や決まり事を身につけ、消化していくことが必要となる。しかし、それ以前の、一般的なレポートや論文の書き方については、卒業論文と言っても、ふだんから提出しているレポートと異なることはない。その意味では、普段のレポート作成の段階から、卒業論文を視野に入れて、文献の収集や正確な引用に配慮しておくことが重要である。

なお、文学部では、「文学部の卒業論文指導申込に際しての諸注意」という文書を用意して配布しているが、そこには、より詳しい情報が、研究分野ごとに記載されているので、自分が関係する分野はもちろん、他分野についても目を通しておくことを強く勧める。

【経済学部(経済学関係)】

大学学部における卒業論文の作成についての、一般的な指導ガイドラインについては、各先生方からもご指導があることかと思われますので、ここでは、特に、経済学部在籍し、経済学部系統の領域について、卒業論文を作成しようと考えている諸君に対して、その取り組み方について、若干のオリエンテーションを行ないたいと思います。商学部系統の領域だけではなく、他学部の諸君にとっても、参考になればと思っております。

経済学部において、卒業論文指導を受けるようになった学生から受ける質問には、様々なレベルのものがあります。最も初歩的な質問は、一体、何をしたらよいのか、というものです。次に、何をやりたいのかは、おおよそ決まっているのだが、どのようにして取り組んでいったらよいのか分らない、というものです。更には、もう何回も指導を受けているのだが、一向に捗らず、どのようにまとめていったらよいのか、分らない、というものです。それでは、これらの質問に対して、ひとつずつ、答えて行くことにしましょう。

1. 何をテーマに選ぶか

先ず第1に、何をテーマに選んだらよいか分らないという、最も初歩的な疑問についてです。そもそも、卒論指導を受けるようになった学生は、既に、主要な専門科目を履修しているはずで、そして、経済学部の卒論研究は、これらの専門科目の内容を基礎としているといえます。中には、専門科目の履修と、卒論研究とは別のものと考えている人がいますが、それは大きな誤りです。専門科目を履修する中で、さらに学問的に深く考えてみたいテーマが出てくるはずで、経済社会の動向や、その歴史的な発展の中で、自分が重要と考えている幾つかの問題点があるはずで、もし、そのような問題やテーマがないとしたら、もう一度、これまでに履修した専門科目について、教科書や参考文献を読み直してみてください。また、関連する分野で、最近発行された新刊書を読んでみてください。また、学生諸君の中には、早く卒業をしたいと、必修科目を履修し終える前に、より専門的な科目や他学部の科目の単位を取ってしまい卒論研究に取り組み、困っている人も少なくありません。そういう人には、先ず、必修科目、特に、経済原論や経済政策学、経済史を履修し終えることを薦めます。経済学は、体系的な学問であり、より基礎的なものを前提に、その上により特殊な領域があることを忘れないでおいてください。そして、そのような段階を踏めば学習がしやすいように、カリキュラムができています。

2. どのように取り組み始めるか

次に、テーマは大体決まっているのだが、どのようにして論文研究を進めていったらよいか分らないという疑問についてです。このような人の多くは、テーマにそって、第1

章から書き出そうとする人が少なくありません。しかし、論文は、親しい友人にあてる手紙のように、すらすらと書いてゆくものではありません。論文は、一つの議論なのです。議論である以上、そこには、設定された問題、すなわち一体、何について、しかも、そのうちのどのような点について、論じるのか、という点が明確でなければなりません。また議論である以上、一体、結論は何か、どういうことを主張するのか、という点も見通しが必要でなければなりません。さらに、どんなに結論が明確でも、空理空論では意味がありません。自分の議論を主張する為には、データや資料、参考文献が必要となるのです。やっているうちにきっと何かが見えてくるはずだ、というようなやり方では、方向を見失い、同じ所をぐるぐる回りをしてしまう、というようなこともしばしば起こります。自分のテーマに関する、学問的な問題点を整理して、その中から、自分が主張したい結論を考え出すということがなければなりません。データはきわめて重要ですが、それ自体は指針を示してくれません。諸君の方に問題意識と問題の見方がないと、ただデータの山の中で迷子になるのが関の山です。語るのは、諸君自身なのです。

このように学問的な問題点を整理するには、そのテーマについて、これまでの研究者がどのような研究をし、いかなる議論がされてきたかを調べるのが、まず必要です。それには、出版されている単行書を読むだけでは不十分です。多くの第一線の研究は、単行書ではなく、学術雑誌にまず発表されます。しかもそのような貴重な論文でも、単行書としてまとめられないことも多いものです。ですから、皆さんが取り組もうとしているテーマについて、単行書ばかりでなく学術雑誌に発表された論文も探して読まなければなりません。そのような勉強をしてゆくと、これまでの20年なり30年なりの間に、当該テーマについて、さまざまな研究者の間で、どのような議論が闘わされ、その結果として現在、いかなることが問題となり、何が未解決の課題として残されているかが分かってきます。このような研究作業を、研究史の整理と言います。皆さんは、よく「もっとテーマを絞らなければいけない」ということを指導教授から言われると思いますが、それは、ただ闇雲に小さな問題をテーマにすればよいということではありません。ここに述べたような研究史の整理をしながら、当該テーマの範囲内のどの部分に取り組む価値のある箇所かを学びながら、テーマを絞ってゆくことが必要です。

経済学は、そもそも、経世・済民、の学であります。経済学の一面は、科学的な方法を用いて、日々変化する経済社会を鋭く認識することです。そして、他の一面は、そうした現状認識の上に立って、どのように経済社会の現実を、理想や望ましい目標に向かって、改良、改善していったらよいのかを論じることです。現状認識はあっても、目標となるべき価値がなかったり、あるいは、理想を追いかけるあまり、現状認識が甘かったりすれば、経済学の論文研究としては不十分であると言えましょう。卒論に取り組む第一歩は、論文全体を通じて、一体、どのような議論をしようとしているのかを、研究史を整理しながらじっくりと考え抜いて、その議論の骨格を形作ることにあります。構造がいい加減な建物であれば、いつまで経っても、完成することは難しいと言えます。

3. どのようにまとめてゆくか

さて最後に、卒論研究は始めてみたものの、なかなか思うようには捗らず、いつまで経っても終りそうにない、あるいは、テーマを変えてみた方がよいのではないかと迷っている学生諸君についてであります。テーマを変えることは、いつでもできます。しかし、何故、これまでの卒論研究がうまく行かなかったのか、その原因が分っていなければ、次のテーマについても、また同じようなことになるかもしれません。とりわけ、卒論研究は始めたものの、まだ、原論や統計学の単位が取れていないような場合、経済学の基礎の部分が十分ではありませんから、どんなに金融や財政、あるいは、開発や労働、環境について興味があったとしても、経済学的な分析力に問題が残っているので、ある程度以上に研究を進めていくことは難しくなります。

また、中には、あまりにも手を広げ過ぎて收拾がつかなくなっている場合もあります。そのような人は、経済社会の問題の全てを論じることはもとより不可能であることを知らなければなりません。えてして、このような場合は、次から次へとテーマを広げることによって、完璧を目指そうとするあまり、実は、本来やるべきこと、すなわち、大胆に結論づけ、大事な要点とそうではないものを、明確に仕分けることを、後回しにしたり、無意識のうちに避けていることがすくなくありません。テーマを広げるのではなく、はじめは小さなサブテーマと思えたものの中に、全体を考える事例があることも多いものです。研究の段階では、あくまで慎重、かつ、入念に努力を惜しまずに作業をすることが大切ですが、同時に、結論づけたり、全体の議論をまとめ上げるときには、大いに大胆であるべきです。そうしないと、卒論研究は終わりません。

卒論研究は、諸君が、経済学部プログラムの中で学んだことの集大成であることを忘れないようにしましょう。原論をはじめ、多くの専門科目の履修を通して学んだことを基礎に、それらの考え方や分析の方法を応用して、一つのテーマについて、総合化を行なうのが卒業論文研究なのです。ちょうど、諸君が、自動車の運転免許証を取得する場合、教習所で、幾つかのコースを取り、更に、そのひとつひとつについて、実習を重ねることと思います。そして、最後には、路上で走行のテストを受けるはずですが、それまでには習ったことの全てを応用しながら、諸君自身の判断をもとに、車を運転するという事です。卒業論文研究は、ちょうどこの最終の路上テストに匹敵するものと考えていてください。

それでは、皆様のご健闘を祈ります。

以上

【経済学部（商学関係）】

1. 商学関係の卒論指導を出願するということ

通信教育部に商学部はありませんが、多数の商学部の教員が、卒論指導を担当しています。商学部は、もともと経済学部商学科であったものが、1957年に独立して設立された学部です。このことにみられるように、経済学部と商学部における研究対象・研究方法は近接しています。両者が違う点は、もしかしたら、経済学が企業の内部や消費者の心理などのミクロな視点を重視してこなかったのに対して、商学部が擁する経営学・会計学・商業学などが、それらの視点を重視していることかもしれません。しかし、以前から、そして近年はとみに、経商をまたぐような研究対象や研究方法が、生起・興隆していますので、「自分の作成したい卒論は、ビジネスに直結した商学関係の卒論だ」と考えていたとしても、それが、はたして商学関係の卒論なのかどうか、つまり商学部の教員に対して卒論指導を出願すべきかどうかについて、熟慮が必要です。

例えば、「広告」という研究対象について論考したいと思ったとき、商業学やマーケティングの理論を用いて論文を作成することができるかもしれません。しかし、広告は需要曲線を上にシフトさせる、価格感度を緩和させる、といった視点に立って、経済学の研究方法で分析することも可能です。経済学部では多数の科目が設置され、既存知識を紹介しているわけですが、単に、それについてレポートを書いたり試験を受けたりするだけでなく、それを応用して卒論を作成することは、卒論作成上の醍醐味です。これをお読みになる皆さんは経済学部の学生でしょうから、まずは修得した経済学の知識を応用するという研究方法を用いて、ご自分の研究対象と向き合おうと試みてみるとよいでしょう。

卒論指導の出願書類には、「指導を希望する教員」を記入する欄があります。上述のように、希望する研究対象のみを頼りにして指導教員を選ぼうとすると、ご自身が希望する研究方法と、教員が普段依って立つ研究方法との間に、ミスマッチが起こってしまいかねません。それゆえ、円滑な卒論研究／卒論指導が進むように、あなたは、後述するような仕方で、卒論のテーマを明確に設定して、それにマッチした教員を見つけなくてはなりません。経済学部および商学部の教員はみな、それぞれの学部や自分のウェブサイトを通じて、専門分野や主要な著書・論文を紹介しています。また、各教員が指導する通学課程の学生たちによっても、卒論やその他の研究活動を紹介するホームページが開設されていたり、そうでなくても、学園祭「三田祭」にて「三田祭研究展示」が実施されていたりします。それらを観覧することを通じて、事前にどのようなテーマの論文を指導可能な教員が商学部に在籍しているのかということ調べて、ご自身のそれとマッチした教員を「指導を希望する教員」として必ず明記するように心がけてください。

2. 商学関係の卒論のテーマ設定

テーマ設定の作業は、もしかしたら、まるで白いカンヴァスを目の前にした画家の、何を描こうかという悩みのように、なかなか進まないかもしれず、しかしながら、なかなか進まないことに焦って描く／書くことを安易に決めてしまつては、のちのち無駄になったり後悔したりするかもしれないような、極めて重要な作業です。

商学関係分野の卒論を作成する場合、当然ながら、「経営」、「会計」、「商業」、「経済・産業」の4分野の範囲に属するテーマについて論文を書くことになります。そうでない限り、商学部教員の指導を希望しても通らないことは無論のことです。

さらに、テーマ設定について、もう一つ注意すべきことがあります。それは、冒頭に触れたとおり、商学部の諸分野の多くが、企業の内部や消費者の心理などのミクロな視点を重視してきたことを背景としてか、商学部の教員に卒論指導を希望する学生によく見られる、ある一つの過ちに関連しています。それはすなわし、単に、自分の会社や業界の歴史や現状を記述したり、将来こうあるべきだと主張したりするだけのものを、卒論として執筆したいと計画するという過ちです。

「過去はこうだった」「現状はこうだ」「将来こうあるべきだと思う」といった記述や主張を展開することを目的とする論文は、商学関係分野に限らず、卒論を含む学術論文にはなりません。学術論文はおおむね、「なぜ企業や産業や消費者は、〇〇なのか…この疑問に対して、これまで××だからだと回答されているが、はたしてそうだろうか…そうではなく、△△だからではないか、なぜなら…」というふうに、展開していくものでなくてはなりません。

事実、このテーマ設定の作業には、各分野・各個人に固有の流儀があるかもしれませんが、おおむね、次の三点セットが大切ではないかと個人的には考えます。一つめは、「なぜ企業や産業や消費者は、〇〇なのだろうか？」という、なぜ疑問文（why question）を設定すること、二つめは、「この疑問に対して、これまで××だからだと回答されてきたが、はたしてそうだろうか」と、先行研究の主張を否定すること、そして三つめは、「そうではなく、△△だからではないか」と、新たな持論を打ち立てることです。

様々な先行研究がどんなトピックスについて何と主張しているのかを慎重に吟味してください。そして、彼らの取り組むトピックスに対し、あなた自身が没入してください。そして、彼らの展開する主張に感動し、彼らに敬意を払ってください。しかし、彼らの主張の問題点を探し、彼らを凌駕する主張を展開しようと努めてください。これらの事項がテーマ設定のコツではないかと思えます。専門の研究者の上をいくような主張を展開することが一介の学生である自分に出来るのだろうかという心配は無用です。商学は、ビジネスマンとして、あるいは、消費者として、あなたにとっても、とても身近なトピックに満ちた分野のはずです。経験を活かして、優れた卒論を執筆しようと努めてください。

3. テーマ設定後の進め方

第1項で述べた「卒論指導の出願」は、第2項で述べた「テーマの設定」に関連づけつつ行われます。つまり、第1項の、どのような研究対象・研究方法の論文を書くかについて考え、それを指導可能かどうかという視点から指導教員を選ぶという作業は、第2項の、なぜ疑問文の設定、先行研究、持論の3点について設定される卒論テーマに関連づけて行うべきことです。つまり、テーマ設定後の作業として行うべき最初の作業は、卒論指導の出願だということです。

その後の作業は、指導教員と話し合いつつ行うとよいでしょう。自力で設定した卒論テーマを指導教員に聴いてもらい、もし必要ならば基本方針の調整を行います。また、追加的に読むべき先行研究論文があるならば紹介してもらいます。指導教員には、何でも遠慮なく相談し、卒論の高質化を目指してください。

通学生に週に一回会う機会があるのとは異なり、通教生には半年に一回しか会う機会がないのが、一般的です。そんな通教部生にとって必要なのは、卒論を書き始める前と同じく、「文献から学ぶ」能力です。先行研究は、どんな理論を使い、どんなデータをどんなふうに使っているのでしょうか。どのような章立てをしているのでしょうか、各章にはどんな段落分けで、各段落にどんなことをどんな表現で書かれているのでしょうか。主張内容だけでなく、作品としての論文を細部まで観察し、自分の卒論作成を進めるうえで何でも活用していこうとしていく姿勢が重要です。

しかし、通教生は独りぼっちではありません。なかには指導教授と会う半年に一度の機会を何度も逸し、いつまでも卒論が書けないでいる通教生がいますが、それではいけません。「文献から学ぶ」が上手くいかなかった場合、早めに指導教授に相談するとよいでしょう。また、より気軽な相談相手として、慶友会の先輩に相談することもおすすめできます。あるいは、家族や友人との普段の話題のひとつとして、卒論について会話してみるのも有効です。なにしろ商学は、新聞や一般経済誌の中の記事としても取り上げられるような身近な話題を取り扱うような比較的身近な学問ですから、何かふとした会話が、行き詰まりを解消する糸口になるかもしれません。卒論という作品を完成させるには、多くの山を乗り越えていく必要があるでしょうから、ときには周囲の力を借りることも考慮に入れるとよいでしょう。

それでは、皆様のご健闘を祈ります。

【法学部甲類(法律学科篇)】

1 卒論指導に応募する前にしておくべき事

卒業論文作成に入る前に、学生のみなさんにぜひお考えいただきたいのは、卒論指導を早い段階で受けるよりも、まず先に通常のテキスト科目の単位を万遍なく取得し、法律学という学問体系を頭の中に作り上げておくことの方が、はるかに重要であるということです。法律学とは積み重ねを重視する体系的学問分野です。すなわち、卒論指導を受ける前提として、そのテーマに直接関わる科目だけでなく、かかる分野の基礎科目さらには、周辺ないし関連科目が十分に理解できていることが研究の全ての基本になるということをもまず何より念頭に置くよう、ご指導願います。

おそらく学生の側には、早く卒論執筆にとりかかれれば何年もかけて良い論文を書くことが出来るという、幻想があるのではないのでしょうか。一つのテーマにつき時間をかけて丹念に精査することは確かに有益ですが、法律学に関していえば、その前段階における蓄積が肝要であることにつき、とくに注意が必要です。すなわち、法律学は積み重ねの学問であるため、ある特別法の領域を研究するためには、その領域の基礎となる一般法的領域の知識が不可欠です。例を挙げるならば、労働法の領域の研究には、憲法・民法総則・民法債権各論・債権総論の領域の知識を用います。同じく社会保障法の多くの裁判例は、行政訴訟でありますから、当然行政法の知識が必要になります。また、憲法・民法・刑法分野のような基礎科目の中からテーマを選択する場合も、憲法なら行政法など他の公法系分野の科目、刑法であれば刑事法分野の科目全般、そして民法であれば民事法科目全体にわたり、習得していることが求められます。

このように甲類においては、「急がば回れ」という格言を思い起こし、確固たる基礎・土台の構築に努めることが重要です。

2 テーマの選び方

通信課程の学生の場合、ご自分の職業あるいは通常の生活から卒論のテーマとなりそうな興味の対象を探すというのは、当然といえるかもしれません。しかし、ここ数年初回指導の調査票を拝見して、そのような仕方では、場合によって法律学的ならざるテーマを設定してしまう危険があると感じます。

法律学とは、上述したようにきわめて体系的な学問です。そのために、本人にとっては大問題であるとしても、きわめて特殊な職業の方々しか利用しない特殊な法領域について研究するには、無理があります。初学者が論文をまとめるには、参考となる資料（専門書、専門論文、裁判例、等）が多い分野の方が、まとめやすいのは当然です。そのため、特殊な小さい領域に的を絞れば絞るほど、全く参考とすべき文献が無く、したがって論文としてまとまらないという状況に遭遇します。

あるいは、法律学というよりは、あたかも社会学であったり、歴史学であるようなテ

テーマを選定してくる学生もいます。これらは、せっかくテーマらしきものを選定しても、法律学科にはその指導に当たる教員を見出すことが困難ですし、また資料も少なく、結果として法学部の卒論としては完成できないことになりかねません。

もっとも、選択したテーマについて直接に言及する文献が少ない場合であっても、自分なりの新たな視点ないし問題関心にに基づき、他の問題と関連させながら検討対象を膨らませたり、フィールドワークにより情報・資料を補うなどの工夫を凝らすことは可能です。参考文献が多いテーマは、既存の業績に依拠しうる点で容易に問題展開することかできるという利点がありますが、自己の独創性を発揮しにくく、ともすれば、既存の文献等の内容をまとめるだけのレポートになってしまうという難点をともないます。これに対して、参考文献が少ないテーマは、自己の特色を出しやすい反面、視点と展望が十分に確立されていないと、論文作成に至らないおそれをはらんでいます。

したがって、重要なのは、卒論になりそうな複数のテーマを日頃の勉強あるいは各自の生活の中から見出す努力は必要ですが、同時にテーマとして設定する前に、そのテーマが果たして法律学科（甲類）の卒論として結実しうるテーマであるか否かを、予め自らチェックすることです。「何となく関心がある」という程度の動機から、単に調べてみたいというだけでは、卒論にはなりません。卒論はレポートではなく「論文」なのです。いかなる点が法的に問題となるのか、そして自分はどのような視点・問題意識からいかに展開したいのか、何を主張しようとしているのか、予め展望を明確にしてから、作成に臨むべきでしょう。

そのためには、上述したように、日頃から法律学の体系を念頭において、万遍なくテキスト・参考文献に触れる努力をしておく必要があります。卒論のテーマは、全くの「無」から生ずるのではなく、日頃の学習・蓄積から見出されるのです。

3 資料収集の方法

自分の興味ある領域が、果たして法律学の体系の中でどこに位置しているのかを知ったならば、次にその分野の参考文献を収集して、どの程度の資料入手が見込めるかの当たりを付ける必要があります。上記の2のなかで述べたように、全般的な外れであったり、あるいは資料が無い分野については、卒論はまとめ難く、上述したような工夫を要することとなります。卒論をまとめる際には、そのテーマに係る資料の一覧を作る必要があります。

同時に、卒論のテーマが決まった後のことにも、言及しておきましょう。卒論のテーマが決まったら、そのテーマに関連する資料の収集にかかります。そのために、どのような文献が当該テーマに関して存在するのか、一覧を作っておいたほうが便利です。そのためにかつては書籍体のビブリオグラフィを使用しました。しかし現在では、多くのデータベースがありますので、その点、時間の節約が出来ます。

ただし、そのデータベースもキーワードの設定の仕方やあるいはそのソフトを作成したときの専門的知識の不足からか、万能とは申せません。例えば、文献一覧を作りつつ、

ある程度の数の資料を読みこなす内に、多くの資料で必ず引用されている文献があったとしたならば、それは重要な文献なのです。場合によってはデータベースからはじき出した一覧表にそれが載っていないという事態も生じ得ますが、このようにしてマニュアル検索でたどり着いた文献は、重視すべきです。

4 資料の解読と問題の展開 —「章立て」作成—

これらの文献を収集する際には、一覧を全部作ってから読むのではなく、収集と同時進行でそれらの中から重要な物について読み進めていく必要があります。ある程度の数の文献を集めたならば、その中で資料的価値が高くしっかりした引用が付いているかなりの枚数のあるモノグラフを、読みこなします。

なぜならば、あるテーマに係る文献は、多くの場合、同じ事を繰り返し書いているわけですから、もしもあるテーマに関して百の文献があるならば、その中でも価値が高く、充実した専門論文を10から20読めば、そのテーマにおける論文の概略は作ることが出来ます。論文のテーマが決まったら、資料収集、資料解読、そして、御自分の論文の章立てを作ること、この三つの作業を相互にフィードバックさせながら、研究を進めます。

ここで何故、自分が書く論文の「章立て」を、概略であれ、作る必要があるのかといえば、資料を読みこなしつつそれらを分類していくためです。いわば章立てを作ること、それぞれの章のレッテルの付いた箱を仮想することです。今読んでいる資料が、将来書く論文のどこの部分に使えるか、いわばそれぞれのボックスに振り分ける作業をする為なのです。資料を読むということは、ただ漫然と読むことではありません。初期の頃は、自分が選んだテーマの全体像を頭に描くために読み、中頃からは、これから書く論文のどの部分に使えるかを考えながら読むのです。

ただし、この「章立て」については、論文執筆の課程で、修正・変更することが大いにあります。資料解読により知見が増大し、あれこれ考察していくうちに、検討対象が拡がりを見せたり、新たな問題関心が湧いてくることは当然ありうるのです。そのため、当初のプランの再構築を余儀なくされることがありますが、このような「発展的変容」はむしろ進歩とみるべきでしょう。もちろんそれは、あらかじめ、上記の1から3の条件を充足していることが前提となりますが、論文はこうしたスクラップ・アンド・ビルドの繰り返しにより、充実度が増すものです。したがって、最初に立てた計画通りに展開しないとしても、必ずしも悲観することはありません。指導教授と相談しながら、問題点と自身の視点をあらためて整理し、的確な軌道修正に努めましょう。

5 文献の引用法等

邦文法律文献の引用法については、アメリカの論文ほど厳格なサイテーションの仕方が決まっているわけではありません。引用法に関し、邦文のみまとめた書籍は無いようです。指導教授が決まった段階で、各自指導教授から、御教示いただいて下さい。

参考までに、以下の書籍を挙げておきます。論文作成の準備・資料の収集・執筆の手順など、役に立つ記述の多い本です。

田高寛貴=原田昌和=秋山靖浩『リーガル・リサーチ&レポート』（有斐閣、2015年）

6 まとめ

以上のうち、少なくとも、1～3をご自身でなさった上で、卒論指導に係る調査票をご作成ください。例年、法律学の論文になり得ないようなテーマのもの、あるいは、何ら資料を調べず思い付きで書いたような不十分な内容の調査票が提出されます。資料のある程度を読みこなし、卒論になりそうだという当たりが付いてから、応募することが重要です。

同時に、卒論作成は、すでに大半の単位を履修し終えた後に始めても、一向に遅くはありません。むしろ、早々と卒論作成にかかったものの、語学の単位が取得できず退学になる学生、あるいは卒論作成に延々と5～6年も費やしているうちに、興味関心が他へ移り、また一からやり直している学生などを見ることがあります。

卒業論文とは、まさに大学教育の最後を飾る研究です。ですから、基礎を大切にし、ある程度の知識が身に付いてから取りかかる方がより充実した研究につながるものと思われます。

これは、慌てて卒論に挑戦しようとする学生が多い中で、ぜひともお考えいただきたい点です。いずれにせよ、学生の皆さんには、大学においてこれまで培ってきた学問の集大成に相応しい、手応えある作品を切に期待しています。

【法学部乙類(政治学科篇)】

【はじめに】

法学部政治学科の教員は、5つの部門に所属している（政治社会理論・日本政治・政治思想・国際関係・地域研究）。これらの研究領域の違いを考慮せず、しかも手短かに卒業論文作成上の注意を述べることは困難である。従って、ここでの説明は極めて概括的にならざるを得ない。詳しくは個々の先生方にお伺いすべきであることを前提にし、かつて「三色旗」にも記した内容をもとに述べてゆくことにする。

【対象の選択】

まず最初に注意すべきは、何を書くのかを決める際に、対象の範囲を限りなく絞り込むことである。諸君の選ばれるテーマの大半は、あまりにも広すぎるのが実状である。その多くは、対象のどの部分をどの視角からどのような方法で接近するのかまで明確にされることはなく、漠然と対象を眺めているのである。

【事前の準備】

どの部分に問題があり、どのようなパースペクティブから、どのようなアプローチで対象を分析すればよいかが見えてくるためには、対象に関する一通りの把握・対象の理解に有効な理論的視点・対象に迫る具体的な技法について、ある程度の知識が事前に必要である。場合によっては特定の能力、たとえば調査技術・統計処理・外国語などを習得しておかなければならないこともある。ここまでの準備を整え、はじめて筆を持つことになるのである。

【論説としての卒業論文】

卒業論文の制作が、論文ないし論説を構想し執筆することである以上、書かれたものが論説としての形式を踏んでいるか否かが最大の問題となる。内容よりも形式をまず問題とするのは、ある特定の形式を踏むことが、(多くの場合)執筆した内容を意味あるものとし、そのことにより論説としての資格がはじめて与えられることになるからである。もちろん、その論説がいかなる水準の論説を目ざすかによって、論説であるために要求される形式の中身はその細かさを変えることにはなる。しかし、すべての論説に共通し、かつ最も肝腎なる要件として位置づけられるのは、新たな主張を論理的に提示するという点につきよう。

【新たな主張】

ただ単に文献を渉猟してそのままに紹介し、思いつくままに列挙し、意のままに感想を記すだけでは、あるいは目の前にある事象をあるがままに写生し印象を気づくがままに記

すだけでは、論説としては不十分なのである。文献資料や観察結果を整理したうえで、今まで誰にも認識されることのなかった、新たな問題点の浮上・新たな解明法の考案・新たな事実の発見・新たな解釈ないしその可能性の提示が、論説であるためには必要不可欠である。こう述べてくるといかにも大変そうに見えるが、それほど難しくなくできるやり方も工夫しうるのである。

確かに、新たな問題点や解明法を見いだすには、残された課題を知るための地道な文献探査に加えて一瞬のひらめきを逃さぬことが第一であり、これには幸運の女神がほほえむことが必要かもしれない。また新事実の発見には忍耐強い観察に加うるに偶然の贈り物によることが大いに関係するかもしれない。これらをなし得ることは容易でないが、新たな解釈を提示するだけでよいのであれば、短期間の努力のみでも、ある程度のところまではなんとか達成できるものである。以下に示すのは、新たな解釈の提示に役立つと思われる、ひとつの例としての方式である。

〔ある方式〕

その方法とは、自分が述べようとする事柄が主張であれ疑問であれ意見であつてもかまわないから、それを仮説として、明確かつ精確かつ簡潔な形で提示し、その仮説が成り立つかどうか検討する努力をしてみることである。ただし、やみくもな思いつきでは検討段階でつまずき、検討不能となることが多い。既に述べたごとく、仮説として提示するには最低限の事前準備の必要となることは言うまでもない。だが、学生諸君が卒業論文を書こうという気持ちになるときは多少なりとも準備作業を済ませており、その時点で何らかの問題意識なり疑問に感ずる事柄が思考の底に胚胎しているのではなからうか。それら問題なり疑問に対する自分自身の考えを、例えば「それはすべてこういうことにちがいない」という断定文で書くことから始めればよいのである。そのように記された自らの解釈はすでに立派な仮説となりうるのである。

さて、仮説を提示したということは、その仮説の検討が次なる段階に控えているわけだが、卒業論文制作という水準に限っていえば、大事なことは仮説を検討し、仮説を巡る論理を彫琢することであつて、決して仮説を証明もしくは反証することではない。証明ないし反証にまで筆を進めることができ、研究の最終結果を明らかにできればそれにすぎることはないが、卒業論文の段階でそこまで要求するのはかなり過酷であると言えよう。